

グローバル視点の大切さ

“世界全体を見て、関わっていく力”は時代の要請であり、
教室と地球をつなぐ授業では、日本語で思考力を深め、英語
でコミュニケーションする必要がある。

渥美育子

1. グローバル視点は時代の要請

日本は国際化に成功し、グローバル化につまづいている。これはどういうことか？ 今回の変革は、人間の視点・発想が「国」単位から「地球」単位に転換したという、大前提の変革である。カリキュラムレベルの改革ではない。世界が急速に変わり、教育が後追いしているのだ。特に日本人が遅れを取り、世界の主要プレーヤーになるためには待ったなしに必要なのがグローバル視点の獲得である。

1991年12月のソ連邦の崩壊をきっかけに共産主義諸国も「市場経済」に移行した。これは大変な変化である。冷戦体制の外にいたイスラム圏の大半も含め、世界中の国や企業が原則自由競争を通してビジネスをする時代がはじまった。90年代にはデジタル革命も起き、世界の仕組みや価値観が猛スピードで変化し、21世紀になると人間の歴史上初めて「世界市場」が出現、地球レベルの大競争の時代が始まったのである。これがグローバル時代だ。

日本はアジア市場、ラテンアメリカ市場がまだ未発達、イスラム圏の大半も市場から抜け落ちていた80年代に、ハイテク高

品質の製品を作り、国内ビジネスを海外に拡張する国際化に成功した。しかし実際には米国と2、3の欧州の国を通してしか世界を見ていなかった。冷戦体制が崩壊した1991年には運悪く経済バブルがはじけ、山積になった国内問題にとらわれ「失われた20年」に突入したことは周知の事実だ。

その間世界は資本主義の時代からポスト資本主義の知識産業の時代へ。この激動を描いた『フラット化する世界』^{註1}でトマス・フリードマンは「2000年頃、世界中の人々がある日突然個人としてグローバル化する絶大な力を持っていると気づいた」と書いている。しかし、世界中の人々の中に日本人はほとんど含まれていなかった。その後どうなったのか？

昨年春、スイスのビジネススクールIMDの学長ドミニク・テュルパンは「日本人は視野狭窄だ」と指摘した。^{註2}

視野狭窄とはグローバル視点に欠けるということだ。

グローバル視点こそ、時代の要請なのだ。日本人はこれまで一度も世界全体としつかり向き合っていなかった。教育にたずさわる者はいま日本の子どもたちに、グローバ

ル視点を持つことによつて個人が絶大な力を持ちうるのだと教えるべきだ。

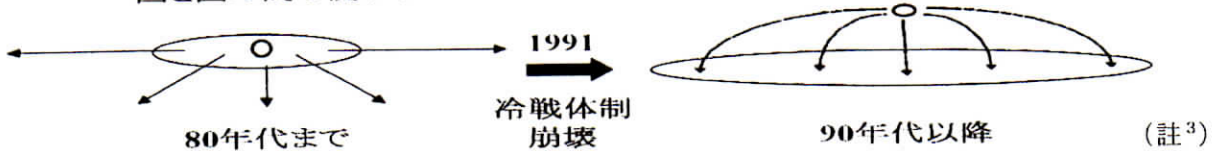
2・グローバル視点の定義と特徴

では、グローバル視点とはどういう視点なのか？「国際的な視点」が国を単位として国と国の関わりに関心を当てるのに対して、「グローバル視点」とはGlobeが地球としての地球を表すことから察することができると同時に、地球を丸ごととらえる視点である。グローバル視点にはもう一つ時間軸を加えることができる。人間がこれまで行ってきたことを

“国”単位から“地球”単位の見方へ

国際化(International)
—国と国の間の関わり

グローバル化(Global)
—地球丸ごと、世界全体



「超の視点」でとらえ、そこに法則を見出して未来にあてはめる。すると未来を予測することができるようだ。たとえばいま一神教の限界が見えはじめ、一神教を作り出さなかった日本人が再評価される可能性も出てきている。

「国際的な視点」と違って「グローバル視点」が最大スケールの空間軸・時間軸の使用というマトリックス思考につながることは、教育方法として大きなポテンシャルを持つ。また、明白なことだが、世界全体も長い時間も肉眼でとらえることができないので、グローバル視点を持つためには心に設定した世界全体を心の目で眺めおろすようなスキルと、最大の空間・時間軸からできている世界共通の座標軸のようなツールを組み合わせて「見える化」していく必要がある。そこに日々変化する世界のニュースをスクラップブックにして導入していけば、俯瞰してみえるものはダイナミックに充実していくだろう。

3・グローバル視点を体験させる

世界という概念も時間・空間の認識もない小学生には、ビルの屋上や山の頂上から

下の景色を眺めおろすという、肉眼による「俯瞰」を教えることから始めることになる。これに宇宙ステーションから眺めた地球の映像やグーグルマップを使えば、眺めおろすという姿勢（スタンス）は理解できるのではないか。

その段階を進展させ、中高校生のレベルで現在の断片的知識教育に横串を通すため、私が制作したグローバル教育の教材「地球村への10のステップ」を紹介しよう。2001年秋にニューヨークで米国中枢テロという地獄を経験して、地球上に住む70億のひとたちは皆、自国民のアイデンティティを育てる「国」主導の教育のほかに世界共通教育が絶対必要だと痛感したことがこれを作成した動機であった。

このプログラムはイントロでグローバル時代のすばらしい可能性と重い責任を理解した後宇宙に飛びたち宇宙飛行士の体験をする。その後地球にもどり10の宇宙駅を通じて理想的な地球村をめざして旅をする形をとっている。各駅から古代ギリシャへ、中世ユーラシアの絹の道へ、現代のアフリカへとサイドトリップして人間がこれまでやってきたことのハイライトシーンを生徒

たちは体験するのだ。旅に向かうときには必ず時間軸と空間軸からなる「飛行記録」をつける。つまりこのプログラムはグローバル視点を共有しながらローカル体験をすることによって世界の成り立ちそのものを実感するという、どこの国の子どもも参加できる世界共通体験プログラムなのだ。

4. 英語教育とグローバル教育の合体

〈地球村への10のステップ〉は1年かけてじっくり体験することも、1日のハイライイトコースを受けてそのエッセンスを味わい後で肉付けしていくこともできる。英語版と日本語版を用意しているので、日本語版に英語を部分的に導入していつて、日本人の子どもの英語教育の教材として使うこともできる。

どうせゼロから始めるのなら、英語を言葉としてだけ教えるのではなく、世界の成り立ちを体験する「教室と地球をつなぐ授業」で教えることを強くおすすめしたい。外国語という言葉として習えば、いつまでたってもネイティブに対して劣等感をぬぐえないが、世界共通体験としてくぐれば座標軸を共有するかぎり日本語で思考力を深

め英語でコミュニケーションすることがごく自然になる。〈地球村〉ではある段階ですべてが一つの大きな意味を持つようになり、とても感動する。そんな時日本人の子どもが思わず「Fantastic!とさけび、外国人の子どもが「すごい!」とさけぶような、そんな授業がやがて普通になるかもしれないのだ。

5. 教師に薦めたい「グローバルに生きる」ということ

グローバル視点を駆使したダイナミックな授業を行うには、教師がグローバルに生きることに肝心だ。普通の英語の授業とグローバル教育として英語も教える授業の大きな違いは後者では、5000年の歴史と世界空間、そして生徒の未来を背負って教える点である。グローバル時代には教師は何を教えるにしても、世界全体としっかり関わる姿勢に切りかえ、かつ勉強する必要がある。誰よりもまず教師が視野狭窄症から回復することが、日本浮上につながるのだ。

最後に「グローバル視点」の効用をまとめてみよう。

● 大局を見ることができるので、戦略思考

を養い、リーダーシップの育成につながる

● 世界全体としつかり向き合うので、人類共通の問題が把握でき、解消のために変革のアクションをとることができる

● 地球上に生きる70億の人たちをヨコ並べにして対等に平等に見るので、フェアな競争や多言語によるコミュニケーション、真の人道主義が身につく

● 大きなスケールでモノを考えるので、いじめや嫉妬などがつまらないことに思えてくる

どれも日本が世界のメジャープレイヤーになるのに必要な能力ばかりではないだろうか。

註1) トーマス・フリードマン 『フラット化する世界 上下』

(日本経済新聞出版、2008)

2) ドミニク・テュルパン & 高津尚志 『なぜ、日本企業はグローバル化でつまづくのか』 (日本経済新聞出版、2012)

3) 渥美育子 『世界で戦える人材の条件』 (PHPビジネス新書、2013)

(社) グローバル教育研究所